わが社のイチ押し

長門屋（山形）

笹林陽子社長、後藤久嗣営業統括

仏壇のリメーク

生活に合わせた形で継承

実家の仏壇をどうするか―。核家族化、住宅事情の変化により、多くの人がいずれ直面する問題だろう。仏壇・仏具・墓石の専門店「長門屋」（山形市、笹林陽子社長）は、仏壇の小型化などのリメーク事業を展開する。「現状のまま引き継ぐのは難しいが、先祖代々手を合わせてきた対象をなくしたくない」との人々の思いを受け止め、個々の生活に合った形に生まれ変わらせている。

社会的課題

同社が本格的にリメーク事業を始めたのは2019年。それまでは個別の相談に応じて取り組んでいた。市売上増進支援センター「Y－b・i・z」から「仏壇の継承にまつわる悩みは今後どんどん増える社会的課題ではないか」と助言を受け、メニューとして明示することにした。

本県は国指定伝統的工芸品「山形仏壇」の産地。高い技術を誇る職人が、木地、彫刻、金具、蒔絵など七つの工程を分業し作り上げてきた。リメークも、同社で修復を担当する職人と、山形仏壇を支える各地の職人が連携して手がけている。

預かってから完了までには4カ月ほど要し、価格は30万円台から。これまで20件ほどを請け負った。両親の死去や自宅の建て替え、引っ越しを機に依頼する人が多い。

営業統括の後藤久嗣さん（47）が大事にしているのは、依頼主に伴走することだ。話に耳を傾けるうちに、歴史や依頼主の思いが徐々に浮かび上がる。複数のイメージを提案し、相談を重ね、リメークにつなげていく。

職人の技術

本県出身で埼玉県に住む男性は両親が亡くなった後、実家の大きな仏壇の扱いに悩んでいた。買い替えも検討したものの、「両親や実家の記憶が詰まっている。小さくして手元に置いておきたい」との思いを諦めきれなかった。リメークでは、高さ160㌢、幅、奥行き90㌢を、高さ61㌢、幅56㌢、奥行き40㌢とマンションに収まるサイズに。依頼主の思いを踏まえ、特徴的なデザインを残して仕立て直した。

東日本大震災の被災者で、宮城県の夫婦からの依頼もあった。仏壇は津波被害に遭い、ボランティアの協力で砂をかき出し、使い続けていた。マンションに引っ越すに当たり、置くスペースが足りず困っていた。こちらも依頼主の希望に沿い、歴史を経たことが分かるように、元の風合いを残した。後藤さんは「依頼主とわれわれが一緒にリメークしている感覚。職人の高い技術を残すという側面もある」と話す。

リメーク事業は売り上げにも貢献しているが、笹林社長（59）は新たな選択肢を用意できたこと自体に意義を感じている。「こういう方法があると分かっただけで安心した」と声をかけられることもあり、「メニューとして明示したことで、潜在ニーズを実感した」と振り返る。

細部まで職人の意匠が凝らされ、これまで依頼を受けた中には「仏壇としては残せないが、何らかの形でそばに置きたい」と、インテリアに作り替えた事例もある。笹林社長は「仏壇以外の形で引き継いでいける選択肢もしっかりメニュー化したい」と今後の展望を語った。（大坪千絵）

リメークの作業を見守る笹林陽子社長（中央）と後藤久嗣さん（右）＝山形市

★長門屋　1911（明治44）年創業。伝統的な山形仏壇をはじめ、仏具などを扱う。修復・リメークも手がけ、職人の仕事を間近で見ることができる工房見学会（所要時間約50分）を予約制で開いている。資本金300万円、従業員数6人。本社所在地は山形市七日町1の4の12。

★笹林　陽子氏（ささばやし・ようこ）　山形北高、青山学院女子短期大卒。日本鉱業（現ENEOS）勤務を経て、2010年に長門屋取締役に就任した。15年から現職。山形市出身。

★後藤　久嗣氏（ごとう・ひさし）　山形商業高卒。不動産業で営業職として勤務後、10年に長門屋に入社。山辺町出身。